

仮設住宅への継続的な支援の実践 in 釜石

今回は岩手県釜石市にある甲子 B 仮設という場所で活動を行った。今まで、釜石市では何度も活動をしているのだが、継続的に仮設住宅を訪れたのは初めての経験だった。8月の遠野プログラムの際に初めてお邪魔をさせて頂き、自治会のみなさんがとても気さくで、そして何より私たちが継続的に活動することを切望して下さいたことを今でも鮮明に覚えている。また、この甲子 B 仮設は 28 年の夏で閉まってしまう仮設なのだが、そんな中、自治会のみなさんが、「仮設を去るまでに、引っ越した先でも孤立しないように、頑張れるように、住民たちの心の体力を付けてあげたい」とおっしゃっていた。その言葉が、私にとって継続をして関わってみたいと思ったきっかけだった。

今回の活動では、夏の活動後、私たちがこれから行っていくことになった自治会に配布する新聞作りに関する打ち合わせと自治会で行う餅つき大会の運営を行った。

まず、新聞作りについて。新聞を作ることになった経緯は大きく 2 つあって、1 つは、甲子には仮設が A.B.C.D の 4 つあり、それぞれが自治会の機能を持っているため、なかなか交流がないという話があったそうで、そのため、それぞれが行っているイベントを一括で見られるようなものが欲しいというニーズがあった。もう 1 つは、今も被災地の支援をしている団体の情報が欲しいというニーズがあった。仮設で生活をしていく中で、一番寂しいのが、忘れられてしまうことだと、初めて甲子を訪れた際に、おっしゃっていた。被災地にいると、どうしても、もう忘れられてしまったのではないかと、という想いを抱くことがあるそうで、今でも被災地と関わってくれている団体があるということを知ることができたら、それが生活の活力になるというお話を頂いたためである。

そのようなニーズの中で、普段は東京近郊で生活をしている私たち学生にできることは何かということを実地のコーディネーターの方と考えた。その時に新聞という案を頂き、学生で新聞を作成してみようということになった。そして今回、その新聞の創刊号を作成し、自治会の方のご意見をもらうための打ち合わせをさせて頂いた。打ち合わせの中では、文字の大きさのことや、内容のことなど、様々話し合いを行ったが、全体を通して、私たちが作成をした新聞をととても喜んでくれたという印象を受けた。内容に関しても、いろいろ意見は頂いたが、「まずは学生の好きなようにやってみて！」と言って頂き、信頼し、また、期待してくれているのだなと感じた。それと同時に、任せてもらったからには責任を持って住民のみなさんが喜んでくれるような、また、外に出るきっかけとなるような新聞を作っていこうと改めて心に誓った。

もう一つの活動は、餅つき大会の運営であった。これは、自治会の年末のイベントとしてもともとあったものなのだが、是非一緒にやりましょうということで、運営側として参加をさせて頂いた。「お餅つき大会」なのだが、お餅つき大会の他にも、豚汁をふるまったり、獅子舞や太鼓を演奏して下さいる方が来たり、尺八を演奏して下さいる方が来たり、りん

ごを 300 個寄付で頂いたり、住民の方々の歌の披露があったり…とても盛りだくさんな会となった。そのイベントの概要書やチラシ作成、スケジュール決定まで任せて頂き、実際に現地へ行くまでの準備がハードだったが、活動を終えた今となつては、住民のみなさんの笑顔を見ることができ、また、私たちも住民のみなさんと関わる中で元気を頂き、やりきって良かったなと思う。また、普段、仮設住宅にお邪魔をしてもなかなか関わることのできない子どもたちも獅子舞を見に来てくれたということが私の中では、とても大きなこととして残っている。現在、仮設住宅にはなかなか遊ぶ場所がなく、友達と同じ仮設の中に必ずしもいない状況である。そのため、私たちが以前、訪問をした際には会うことができなかつた。大人たちは子供たちに比べて、辛い気持ち、たいへんな状況を発信することができるのではないかと私は思う。しかし、子供たちはそういった気持ちを抱え込んでしまっているのではないか。更に、外で遊べなかつたり、友達と離ればなれになってしまい、部屋にこもりがちになってしまつては、これからの将来を担っていく子供たちの健全な育成を阻んでしまうのではないかと思う。そのため、私たち学生が仮設の自治会の皆さんと協力をして、こういった子供たちと接し、コミュニケーションを取る機会を設けていくこともこれから関わっていく中で、できないだろうかと思う。そして、子供たちを通じて、その親御さんたちにも自治会の活動に参加をしてもらえるようになれば、「引越した先でも孤立しないように、頑張れるように、住民たちの心の体力を付けてあげたい」という自治会の皆さんの願いも叶えていけるのではないだろうかと思う。

最後に、私は、もうすぐ卒業となつてしまうため、創刊号を住民のみなさんに届けるころまでしか関わることはできないだろう。しかし、この活動が、しっかりと軌道に乗るところまで後輩たちをしっかりとサポートしていきたいと思う。また、「卒業してからでも、いつでもまた来てね」と声を掛けて下さる方が何人もいて、卒業をして学生ではなく社会人になってからも「帰る場所」があるということは本当にありがたいことであり、また、そういった人との繋がりに感謝をしなければならないなと感じた。

被災地へ行くと毎回、様々なことを感じて帰ってくるのだが、今回の活動は、卒業が迫っているということもあり、この活動を後輩たちがどうしたら上手く、無理なく、続けていけるのだろうかということも、私の中でテーマとなつていたように感じる。今回は国内研修を利用することができたが、個人で交通費を出して活動をするには限界があるということは 4 年間通して痛感している。そのため、まずは、活動の経費をどこから捻出するのか、ということがこの活動を無理なく続けていくために、これから大きな課題となるだろう。先日、現地のコーディネーターの方から助成金の情報なども頂いているので、そういったものにチャレンジをし、私たちの何かしたいを形にしていくと共に、継続した支援を行っていけるように、卒業まで残りわずかだが、関わっていききたいと思う。